

11 東京法学院第六回卒業式

〔「法学新報」第八号 明治二十四年十一月二十五日〕

○東京法学院卒業式

東京法学院にては本月十五日をトし本年卒業せし英語法学科卒業生百五名邦語法学科卒業生二百廿八名の人々の為めに卒業証書授与式を同院構内に於て挙行したり今当日の模様を記さんに

同院入口には大なる緑門を設け五百余坪の広庭には四方に幔幕を張り詰め毬灯輝き国旗翻り表面には高壇を設け以て卒業証書授与の場となし右方を来賓左方を卒業生中央を院友の席となし場の前面を是一般学生の列席所に充てたり来賓には各官衙の高等官貴衆両院の議員新聞記者及び内外の貴顕紳士無慮一千余名さしにも広き庭内も立錫の地だに余さ、りし午後一時一同着席し院長菊池武夫氏前学年の報告をなし卒業証書及び褒賞状を授与し英語法学科卒業生総代兒矢野周藏氏邦語法学科卒業生総代小町谷純氏の答辞あり次て品川内務大臣の演説あるへき筈なりしも同大臣には当日病氣の爲め出席し難しとて大臣秘書官同院講師江木衷氏に書翰を寄せられたれバ同氏之れを朗読し喝采雷の如し次に山田喜之助氏講師総代として簡短なる演説をなし卒業生一同を来賓に紹介し右にて式全く終りたれば夫より来賓院友卒業生一同は楼上の宴会室に於て立食の饗應を享け午後五時一同帰途に上りたりさて当日は天気殊に清明にして一点の雲なく鬢鬣たる佳氣は場中に充滿し最も壮快を感じせしめたり同日江木氏が朗読したる品川大臣の書翰と云ふは左の如し

先夜も約束仕候東京法学院卒業式に臨み今夕は例の談話流の祝辞を一言呈せんと相樂しみ居候処一兩日無理押したる為め昨日も今日も半病人と相成折角の盛典に陪すること能はず諸君へ老兄より宜しく御断可被下候實は左の祝辞を一言吐かんと欲し居りたり

、、、此学校の御招を受け諸君と相見るの機会を得たるは今日を以て始めとす学校の構造と云ひ生徒書籍の類

と云ひ又教師諸君か其人を得たると云ひいつれも此学校の盛大は実にやじか認むる所なり一の私学校としては人を驚かすの外なきなりこの見聞上人を驚かすの盛大を致したる所以の原因は果して何れにあるへきか地獄の沙汰も金次第でこの盛大の原因を金錢に帰するは普通一様の考なるべしやじは決して左に非ざること確信す伝聞する所に依れば此学校創設の際には素より多額の資金ありしにあらざり又其創立者の中にはやじの知己も少なからざるか悉く当時の財産家を以て目すべからざるに似たり(氣に似せた法を説き失敬々々)又教師教則の完備の如きも外形上に於ては実に此盛大を致したるに預りて力ありしならんと雖とも教師教則の完備は必ずしも盛大の結果を生ずるもののみ断定すべからずやじの考には此盛大の原因は外部に於けるものよりも寧ろ内部に在るものに似たり内部の原因とは何ぞや曰く○片師弟の情誼なるもの是なりやじは今日に於けるか如き学校制度の教育を受けたるものにあらず故にやじにして茲に師弟の情誼なる語を担ぎ出さばやじは昔日に於ける古風なる師弟の關係を以て今日に於ける師弟の關係を論評せんとする如くに誤解せらるゝならんと雖もやじは素より昔日の教育法と今日の教育法とは師弟の關係大に其趣を異にするものあるを了知せり然れども今日の学校制度に於けるも師弟の間果して師弟の情誼なからんかこの情誼なくしては一日も学校(就中私立学校)成立を全くするを得ざるを

断言せんとす若し夫れ此学校の教師諸君にして毫も其生徒を親愛せず又生徒諸君にして其教師を敬慕することなからんには教則如何に完備なりと雖も校舎如何に美麗なりと雖も何そ今日の盛大を見ることを得んや

師弟の情誼は實に此学校の盛大を致したる原因にして又将来此学校を維持するの基礎なることはやじの實に信じて疑はざる所にしてやじも亦師弟の情誼に於ては自ら諸君に譲らざることを確信せりやじは常に先師吉田松陰先生を追慕して且夕も忘るゝこと能はざるものなり世人往々やじを以て殆んと之を一種の僻とするものなきにしもあらず然れともやじは毫も他評を顧みるものにあらずやじはやじの良心に従ひやじの信する所を行はんと欲するものなり故にやじは又茲に先師の言行を引用して以て師たり弟たる諸君に告ぐる所のものあり他なし近來法律専門の学校甚だ少からずと雖も英仏独等々其藩屏を固守して一方に偏倚するもの少なからず然れとも外国法律を学ぶの必要は單に之を以て我國の法学を進歩せしむるの材料たるに過ぎざることを注意せざるへからず本校の如き已に英法の長所たる実地応用を主として傍ら仏独の法律を参照するの傾向ありと聞けば決して一方に偏倚するの弊害なかるべしと信す安政六年未己十月廿七日松陰先師の空しく武蔵野の露と消へられし八日前江戸伝馬町の獄屋より入江子遠（野村全權公使の兄にて甲子乱京都にて戦没）に送られし書を見るに京師に尊攘堂なるものを

建て、王事に斃れたるの人士を祠り又大学校を起して大に天朝の学風を起さんとせり其一句に曰く「扱学問の筋目を糺し侯事は誠に肝要にて朱子学 ज्याの陽明学 ज्याの一偏の事にては何の役にも立不申尊皇攘夷の四字を眼目として何人の書にても何人の学にても其長所を取る様にするべし」云々と認めあります先師の書中往々尊皇攘夷の句か見ゆれば諸君は先師を以て頑固なる攘夷家と見らるゝやも知れされとも決して然らざる事は先師を知るもの、皆知る所なり今其一証を示さばペルリの未だ日本に來らざる以前に於て已に外国交際の必要を認めたるを以て之れを知るべし先師年甫二十三奥羽に遊ぶの際迂路永井順正を水戸に訪ひ留別の詩を賦すその句に曰く「四海皆兄弟天涯如比隣」云々由是觀之先師の所謂尊皇攘夷の眼目とは即ち「日本人」たれとの一事にあるを知るべし已に諸君に陳述せるか如くやじは師弟の情誼は實に此学校を維持するの原因なることを確信す又師弟の情誼は古來の沿革上實に日本人たるに固有なる美質なることを確信す而して又此学校は已に日本人たるの教育を行へり豈に盛大ならざらんとするも得へけんや
諸君やじは日本人たるの美質を以て日本人を養成すとの言を以て今日の盛大を祝するの辭と為さん
ナド、片こと交りの談を致す覚悟にて樂しみしも病弱の悲しさ又痔疾の脳（惱）ます所となりいかに辛抱しても洋服を着して盛拳に臨み得ず老台より諸君子へどうぞよろしく御伝へ

御断りを頼む々々

十一月十五日

やじ

江木様

卒業生徒の姓名を記したるものあれは一枚貰ふて帰りくれ
玉へ三百有余の卒業生徒に直接に談話的の演舌を述べさる
は実に遺憾なり何も可然御取計頼むなり